七百四拾八

寛政十年

傾城買二筋道　全

雪華画

へ13
1963
33

新美語 序

孝行に裏も。不孝に受出されてハ。實に川柳点の妙なる事。虚と実に中街。通てふ通を汲解て。意氣路を磨く心の駒下駄。いやな風みハ蹴出し褄の外八文字。婦るも有り。又照しハ

へ13
1963
33

茶屋が軒端の燈灯の。其蝋燭に流れの身。辛氣辛苦の苦界十年。たとへ一文が鉄漿を買ふとも。豈千金に尊しとせん。てれんも手管の長座と。りんきを雅湖の音色にこし連て。通ひ廓に裏茶屋あるく。

遣婆をおだてぬ穴を探して粋を味ふ梅暮里谷紙子。鳴呼其才は高くて。小道尻乃火見櫓を足下に低く。筆頭の走る事。萬一の罾駕をも遅しとせん。不佞此書の伴頭新造とふつて。惣菜に芋

喰く。屁の如くに序文と作りし。謹でこれ〳〵一寸マアお見なんせと

ちういふ。

于時寛政戊午春視初衣裳日

於嗹囉嘍樓上式亭三馬叙

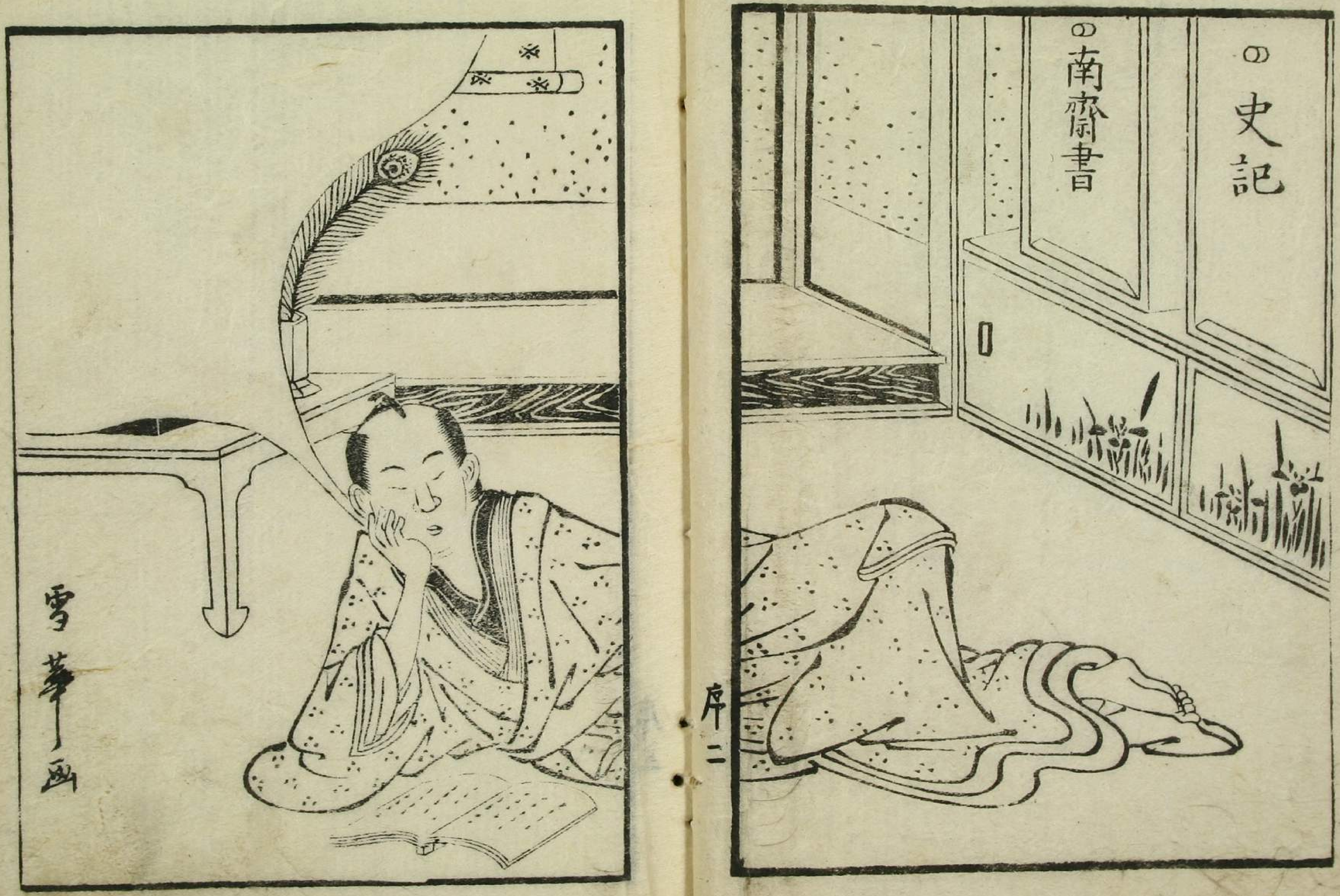
傾城買二筋道序

智者にも一失いう禮ば。愚者乃一徳あて加賀結の鍋も。薩摩布の強もまさるを珍姉の棚て凡毛。脊負ヲり。利お持そ。捨ぐく

通子の云。遊治郎（いろおとこ）乃乖功（ゆきすぎ）は。醜丈（ぶおとこ）が温柔を。猶及（およ）ざるがごとしとぞ。宜（むべ）なり。人は只心濃やかしきこそ。蕩るけれど。ふ僕（てまい）がつくを書（つく）古事（こと）しかり

手乃ちつ云

梅暮里谷峨述


史記
南齋書
雪華画

目録

○夏の床
○冬の床

こしかの衣ハ
往よ紀蓑の
盡ら事
谷峩

傾城買二筋道

谷峨作

○夏の床

世界ハ小見勢客ハ二十五六のそれ風い乃なきいろ男にて腕どころかあるきほど己腕の未至通む地廻り同前逢方ハ二十一二たいていたこう川くしくそあそごころまんきくでも紀四五會め（水洞子で めりやすで）〽合夜半の短さをよけれども、おかふとのごと添寝の嬉しさより口でハいへどまんざらの中を

蒲(へどろ)るなりさの垣根(かきね)まさふくもしいなの蚊(か)乃声(こへ)
とこよりとらつて蟵(かや)の蚊(か)を焼(やき)りやられつらも
氣同(きど)しきりどころか紀裏(かつ)の床(とこ)（川チヤント仕巴）須袁
いはそぬしの声ハいきさぶよ 五郎 声斗(むかり)ほめ
つときみやいとおかんてくるまやア廣小路(ひろこうじ)の十(おろ)
哲(てつ)のうらでハ巌瀾(がんえん)といふりのござ 四ナ なんのこと
さへ 五郎 いふやよぬでつしらだといふするよ 四ナ
(ぢや)むかりしいとのさね百(ひやく)さんとやらといふ声
ぶらねなれもなんどといふのさへ 五郎 おアまあぢなし
そふ声できてきられて百もいろ男ござぞ 四ナ
そりやアぬしらのよふな入(り)こんでおいでな
んすものとだれでもきつぬものハおかせんのさ
おふうさぬしもそこいつ中がいろどぶつけと
ないきつの仕きさせんさそきつさ川をきえんなお
いでなんすところとさふハなりしておきうせなん
し 五郎 そんなよてまへは氣ととませるるえねへ

うゝんおしてへらなんは此(この)ごろハちつとつらをとが
志げくごをのうるうみ血(ち)へかゝるとお袋(ふくろ)の小でら
おる鰹節(かつぶし)をなでゝとしく飛ハねへら〔すゑ〕ヂヤ猫(ねこ)
じやアあるめへしとつてへねへおらがおくろう
いすゆへそーしてあんのかゝさん〳〵〔あり〕あんので
ねへといまころハおさらばお近(げ)んぬせハおすうだ
〔いて〕よふむずといつてあんす口(くち)のそこをはねついす
ゐへおれしさゝなまゝ人のゑをとつてつかうてといお

ふとおりて〔あり〕つまる口ハいつとねへがまおるよおハい
くつゞ〔いて〕おてこなんし〔あハ〕まおりよおいろ
のとれしれて判(はん)ハおがしく〔すゑ〕てへおむづかしい
ねハイ十三で賣(う)れて親判(おやはん)さ〔あり〕十三で賣(う)れ
て親判なれバゝふとて（捨てちうあづし）十三十四十五十六式
四年ハそろせ頼へうつゞ(かうと)せつみ十年おあだ
ゆんぐついる女ござ子が買(かい)ぶけねんゾろだい十
至安ら〔いて〕そしとおてなんすとおりやア〔あり〕おろ

き氣のこしらへとんとこてかへりたさねへけて
やアきれい所（ところ）をはなれねへまはをはちとむ
いてくんなや【内ナ】ヲヽおちやァいや【彦】瘦地（やせぢ）をして
髪うすく枕（まくら）だこのいれき処ますでよくかんで
廿三ではふ足（そく）なしおてまへよわるさおさるね
うがおこくよわぎ【すゑ】むごひ事をつかりて
あんすわんとうまね深川（ふかがわ）まいりしく【五ふ】て
なに深川よいとこずゝりで【すゑ】人がまるいこいおん

すの人【彦】イヤいきごとりふるのよ【内ナ】わのうそ
だいりりゆんよいやをわりお客人（きやくじん）ハをとこれしさん
わどんが志れるまきなんとりおわりお客人ハ（とは父上でし よんかくへー）
志れつてへそのござと（かんざしそ けざしをかく）【五ふ】コテわらとるもど
わげてこや何（なに）ゟわりぜ【すゑ】まわちやァや【みふ】
いや志ずやァかもうちござと（むかふまでと いふところ）【すゑ】まゐまちるが
んしざいぬんこせくすが人の名（な）をさいはゝと
ゞ名をなのるとりいすかしまゐぬしのこい

らうんせうかんし［五ト］それとおもへるれおかなどいく
らたとしこ［以ト］ありいせん［あて］さあこわくおく
がてんやァそんなやぼハなしにてとへいかにや、
高麗（かうらい）やてもむかふまでうりさせさきわこれらし、
まぬのまをたんでいるみもや［以ト］うんせうの
さァこれんしと（ぜんまとまくらみせるハまんざらでせうきかへれんといふこころもち）［あて］まわ
こふもやァなんぶ分貧（ひんなく）之寺の過去帳（くわこちやう）ハすごしぐ
むとうんてハ［春］三年の恋（こい）もさめるかへ［あて］まよか

なり［以ト］なぜ［あて］まてこう銀わるうらかハま
ざさうられのころでいるれがわろふとわりへば［春］
ちやうんせりかすくうひさやァたとへどふいふかすが
わろふやをもぬしのんハ紀ハ身（じごい）でござりやすもしい
すのさうとぐうなんすなうあんでもおいやう
まこきやくへとつきさせあうぬしのふせう
ちなよ客人（きやくじん）ハつき出しいせう［五下］ぞうなとが
とねへ客人とつき出すするもなしまさ指（ゆび）

切錢（きりきり）切てまはつてさとおりかハむかしれぬやうな□（氵ナ）
そしてどうすれバんがすこいさとへ□（土ゟ）そんなかう
いちもんをやいすてゝおかみ□（才田）なんぶへ□（丙ゟ）金
とかしてくるやらびりくり志めへ□（才田）そして外（ほか）
へわけてくの世へ□（土ゟ）いや外へハとりてら旅へがま
かのおどふいふあんちうくでゆら志てね世へがおねぎ
ものて金ゝかりかわまつて遊（あそ）びよきやうしね
へらんぶ内（うち）ハ火（ひ）の車（くるま）ぶられどもおかが水（みづ）車のやふ

口車にまよつてわれ車が坂（さか）とおれくるまはやがて
間（く）もなく苦（く）らうがふそくの心（こゝ）よそれぢれぢらりお
りろいふそくでお袋（ふくろ）と日干（ひがし）するとされ祖へつまか
むまおも勤（つとめ）ぐくいハれてもしとするかくとでも
わらふがそれじやアまわをふぶんとうれ祖へと
いふのぶまこよおも志づりよ味（ぶ）氣（き）がわるは
その志のびと二三本かしてくるやをみすを
やアおれもわがさと内もでよいとりふりのぞ

よくまあのんきさもすりぱかりやすと
れあぜおまりてゐるがやくちく何もそのよ
ふよ茶碗とまいておつけてこのふたくへ[illegible]
としてゝくすハねへまあまくおれよかつさぞ
手前のよぶしとおりふさゆくハちくとハ地切と
きゝねへけつやァあゝ禄へそれともゆくまれ
さいハ借物あゝゆすれぜんまでよさな貳
今ぜかりくしておいてくるやこれざまつてい

ハできねへか【十次】むしんあゝぬしハよくぞくづ
ぐざね。【五ぞ】てきざいゝがまあもくみぐよぼ
うきハよいおぺをもしのいふそのぶさかしくゞいそ
どあらさんぶんの何りをかあ物ざ
まずびじみもうすきよ何ゆまりれゝる男に
黴瘡のしあ免よかりたがひよ志ばしまあ
しもたゝへ金をふことよ頭あく夜もきてみ綿し
跡のて膏薬ぬ評もよかゝすゞりくさとんぜ

それそこ夜のはしがあへはやきこれハ蔵
門（かど）しとみへさしまさつくる夜のむし
はつさふ
五分 コヲなんざそもくと何（なに）としていくはさ
八重（やえ）がりのやりくりう 十両 さういきいくとふう
ざうね 五分 焼（やき）つぎの火うまん乃ちがりさふ
まごふひんとするうすハねへてア禄やる今夜（こんや）ハ
ともり持れがんいりそとんがしてはんどさせ
てやうふ 十両 はんどさるへはんでさア燈（だい）とと
のす物（もの）へ 五分 コヲ掛よもぐうかすがあれが
いりさ事（こと）がでさねへまよみていうまけ哥
のがまんざ家 ハテできまはさいくめしとせ
ずをせうしてたうこうそのねへむまれつさ
て三文乃くめんもむづかしこぶりやすしと
あつていふあうがい大道（だいどう）で菜（くさ）と賣（うり）よりふ
そのこみすぎさといけてもせしが入れ智恵（ちへ）

といふものだらう人形芝居（にんぎやうしばゐ）の太刀打（たちうち）とみへる
よふなふさな袖（そで）から太いうでがでくりあまり
するかしねつかしふ都合（つがふ）でなけりや水犬（すいけん）のやうや
といふ芸蛇皮（まいろを）とさりてもめんひも　かどみかるさん
ちやくとさんまよふ穴地がすいてへんぶやそれで耳（みゝ）
のきはぐ口（くち）らきけると智恵のねへ所をと
つくぬこさや町川屋へやるといふ銭（ぜに）りつけ
だ〔六十〕ありちもい銭（ぜに）のかけとおしへておくん

あんしやう丈夫（ぢやうぶ）なよふならいしきまて智恵
のできるふハぬーと黒焼（くろやき）にしてそれをのんだ
らよからふがねぞふぞ智恵（ちゑ）でわしもこさん
すそふするとかさいゝ男さやアいゝさかなりで
もさやそでよんでやりいす〔五ノ〕何（なに）いろおとこちよ
あのいゝ男ハどんなごろふ芸だいらしく銭（ぜに）ま
の使（つかひ）さんといふめんどろふ其ハ心ハ餅（もち）がすき
ざ麁（そう）こぼとぬられねへよふなしや〔ケ旅〕ぬし

いつんけよよゝはへヅそくらゝせゝぐねいく
かげんは志なんしぞうがよう、すゐへ［茶屋］すゐ
ぶぬさんおちくでいあつゝいかげんはちんや
よ（三隣亡をきら まふしといふ）［すゐ］ヲヤ、やよそれでもおたちじめい
あしそうだいさかねりあく大ちやさくさ
［五ぶ］なんざしすつぎめつうぬゝよおちく
のちやさくのと鼠（ねづこ）が米櫃（こめびつ）をかぢりへ志めいし
なんが玉屋のせりふを小耳（こみゝ）にはさんでも

うねつまうさまうされてはうこそのつて
らをおのつこおちくのちやさくのと
とふもろこし（唐蜀黍）冬ではつゝさつま芋（いも）を賣（うる）と
いふさへあゐびんおゝやさいはやアゐやうねへよし
やなおゐぜんてへてんおゝうそのつゝふまよ
腰（こし）うゝめろされ銭じやアまれはゐねゐゝ屋
ねつぞを取組（とりくみ）ふとおりうばゞ千手觀音（せんじゆくわんのん）へ塩（しほ）
ぶちをしてちぶらうと三年もとみ三谷（さんや）の

毘沙門さま百足を後見にたのんでもまさ
おそかるハ〔次郎〕それどかゝろう組ねへゑって
ドやァねへから〔次郎〕さてふ口からじやといふは
まづ〔すけ〕まづ出世の才ざよねまもおふ郎
ぶね〔次郎〕なるに出世も親がつよひ火口売のて
んびんは菩薩売の杖で地獄へさくし、みせろ
アもへゑふをいふってでるらねふさくおまお乃
寺澄文やァねやまつてはハさらんしと

見へぬハござなくけとかけさろふ〔すけ〕ぬしハ
まさ代く一向な仕方の者よまはまぎれとご
なくけん〔次郎〕なんざ此女をつるて来るとあるぜ
よしやたとへ惣菜のゆるめよ百が梅漬と食
つく五町まち中へ黒飛の糞をたれてもた
まゐふるのがなるをのうへ盲蛇とハうぶるの五
郎兵衛すぞのまへでハちつとハしようけそくあなの
をおききなつてでしやれるがおれときてはへけ

アヽヤアもしのよふなおかりが世の中にさくさあろうがよふな事ばなしだけそのハ箱根の関所でふさねらげさうさ（すね）ニヤこらいのお花さんおきつさんしへおいらくだけとのがていすさかいつそ〻口味がころりくござんすよ（あり）こんふやく乃幽霊がそころてんのお傳馬よのりやしめいハしそふぬめゆくするてのハねへおどけとのがこちらへのささうゝやア氣づいハしやんおかみまのくるうがだけ

そのことはいはしといふ物ごゝろむかふでおもひをくみいて通るつまおんの人間のかぎりとしてねゞまおりとぬかつておわれなければこそしんぼうして又六らびもこそやりきかうら男ねなびまじめんのよびおきされとおりや銭で泣てもてめいてもそうはげハねへぜ（ツア）おんよめし此よふなさやくじんがききろやらねへでもちつとがおちてゆしろゝ役所へもでるとちやんとかゝしいる

さぞ泣てくれどなぜか泪がでへせん流れる水
便までも以て泣くにするを

平気な出行は面会にもまさせんそれくさい
悪をせんとハおのへども毎夜夢に見のどやまされ
バ今ハむあしくどろくと床へ入りぐめつて目
覚ん白蓮王菩薩へ月のはづるを夜の明さとお
りひさといろのげるに若い者をおこし次をい
はさせ表へいづると大さんぐく

○冬の序

世界ハ大見勢客ハ三十一二甚ふ男脊中ま端の
ゆる歌かれとも方ずいきうして如来あり通人なり
逢方ハ中三でとし八十七八さへすう風俗小町なり
ちのけまそ一体發明にて張強情深さなれども
まことしらのおなこ氣にて此客を嬉ふるい
ろんなさせし於若隣座敷にて友吉めらやす
合 雪の夜中のはめてくくてまいりて八隣てといりと

なく枕（まくら）と枕敲（たゝ）いハどのつるさの透（すきま）ありうゆれ
邪間（じやま）をする夜寒（よさむ）の風（かぜ）と分りとりくをかけ合（やい）おふ
て勤（つとめ）も悪（こひ）とうらこして実（まこと）こありし冬（ふゆ）の床（とこ）
サンヤク（チヤン）一重きさんじなとのざれコウくれちやまきさだ
しれう筆をとりていろうつさぞおふくさる外（と）
山（やま）さんさちふきゆくとろてきや呉羨ゆのね外山
さんらおはせいすごみんなんしはいさうより
いしよかいてありゆふしいしておねり

ぐふおすとき一重こゝろいかゞみれりふてねなとく（はなちか）
ねんぶつなぞ叶灯（ねふり）ハとんなぞのふすりけて香文里とふ
ぞしくう一重ぞゞふもしあいせんのき文里それでもおかう
しあらはつきぞせ一重生（うま）れつきてあすりめと
文里そのふまいつがいものとぶちふてアねいそでし
りしとやめんて一ッ呑（のど）ハぞふさ気がすれのふせ一重
まくしハせぞう人まことのせいつれなとばかくら
されてなりくいやんぞやくざかくちれしとめを

いゝげはいておかんせんへ 文里 これじやアきついぞ
成程十七八の時分ハおもしろくもねへるすにゝら
なんでもねへるすみをとさうとのよまはなく
どふでもさきがいやしゆをひかぜ羽
織でもきてゐれハいて
いゝさいけよいゝさて於郷さまもてどもゆころ
かしぼもゆしごれバ恋し恋しまくみ乃
かきをとこのふハ筆のとがまゝ苦紙を引裂

障子のそらより立いるおかくこのしもよふひ出
し中三一重が婦女郎九重ハ障子をあけ
て見ておやといゝさぞうらみて袂を振へ
り廊下をとゝまる胡蝶をよび
九重 これおくよしみさんハ文里さんがおいでなんし
さうおまへせわしいすところてくつまゑ 文里
おいらんさかくもちろうでいゝさいいぞかし
いるすざの九重 サアにてアなぜ此比ハおいてなんせんへ

ひるもよしのさんやたれしとうるさきをしてへし

さおめへさんこそいそがしいこつさね**文里**（ツウケ）お

れも川をはなれしかつされども浮世（うきよ）のならはせ

見えられてこるなりそふござるな

わしも故蝶（こてう）のまねをせよなどあくこれもまいろ

やすさ中三

吉野ヨヤ文里さんよふおいでなんしたなぜ久しく

おいでなんせんとうらんなとまちわびてうるさまだ

そうしておいでいしさなんはまことにとしらるゝのう

ゞふるのおぞうつて九重さんよつくあつくせておくん

なんしさ（ニア）ひとえさんとさいそくおくらんなんし

幾度（いくど）もぬかいらず帰へ帰としておいらいすを

お**九重**まへ川ちよきさんまつさ**文里**なんまゝそよ

もそのふなみつるくれながかくれしいおんなはなぞ（とも）

ちとよるもおめへがそのうるさきはあらそうしているよ

よしのつまらく かんとやらさんす**文里**おめへがさそとつまらく

いやそだちがはしるまいが よしの うんまんせんしまする
文里さんのせどがへしじまへさ サア久しぶりで
はげいちやう 文里 まゝおかへませう よしの そんなら
九重さんおまはいおかあのこのふしいす 九重 ひとつ
たへいせうねさんが揚野からはまりへゞの出処さま
（きせる売りがんぐ／ついで目をみてゐる）いくら一ツつなぎやあな 文里 おめへがさ
ぢふ中かおんきこふところやすくみへもすてゝもて
おーしてくれるからはんそおめへがこのすきそうな

ものをとりかへてつけてきさが アノ忠七はどふ
りてきそうなものだ よしの そりやアもふしこ
でござんすね（間もなく茶屋男忠七ハいろ／＼さかなさけをもたせきたる） 忠七 はふきさま
おまちどふでござりませう はいよく客人がおち
はいましてかりくぐそりくこみおかさよ兄とも
こはまして 文里 よし／＼まあ一ツのまねへか 忠七 ま
いはとのものをのせてまいりてもちりはとぞ
さきませうとそそくさ 九重 よしのさん今（いま）のおはいとは

げいせへ　よの　文里さんはけのりふ志いすまへと（な升）

文里　さうおツしやるとかゝまりおツせへぶ　吉野　てうち

やアいやしむしだりげね　文里　のめるくいあく

ねへ紀い志ねへがこんやはさけの匂（かほ）ひをかぐも

いやざうしさ　よの　そんなりしますゆゑ一ツづけやせう

ら何ざんすね　文里　ふさぐうしさアくあれ

よかまあるげとたべてくんな　よの　それやすまへし

ざんすねはのひとへさんハぞふ志まんしやね　文里

いまこよふかるが　九重　それでもかんざんの（とゝなふにする）　文里　そ

ふりで逃（にげ）よふとおもつく　九重　さりいつる気た

ね今夜（こんや）ハよしのさんもきてゐしもてどつて

かつておひ出されるまでおりいす氣さ　文里　ちは

そうもやられしいが一ツうみま二ツ鏡新志やアねへゝく

九重　うそハさへいさ　文里　そんなあつてたべてくれねへ

けりやア氣がすまねへ　九重　文里さんも少し　文里

まりちまかまつりく　九重　なぜさのふ

扨（さて）此二階中（みうち）迄（ちうまで）よく〳〵おめへもしつて皆こゝろやす

けれバくるねけれバくるねへ障子越（しやうじごし）よこゑぶ

きゝけれバとけちうと咄す有（あり）さまよ

みんなもちよくかざうもあく傾城（けいせい）もかくやハ只の女

まてこ気ふいろくねれきるを繁くまうと河ら

らさねへ、ねへ、ぼうしがくこごぞんじのおら

さハたいがひまごきりしと略（あら）田さそねよ四五人詰（つめ）て

【初瀬路】文里さんハさぜたへさんせんへ【文里】おんへかもいや

さ【初瀬路】あんまりそのよふなげんきもこざんせんでふ

ら熱のそらもまういよふでござんす【よしの】むりよ一ツ

のこちんしな【文里】でふぞねやまりと【九重】まね

アノひとへんさんハ何をしてゐるこれさね【文里】ハテ

まりうちが花（はな）まうちがつぼみ（蕾）ひらぬう（開）

ちのたのしきさ【九重】それでもねんまりと（りとめ）【文里】

おめへがかけるとき花（はな）が散（ちる）まらまねりよつぷ

ねのそのこねへしらおめへがこまえなしておこさ

てへすがねへからなかしずらしいてくれちやアら
らみさぜ **九重** なんのすだら気よかろうがずよう
初瀬路 何シぎんすゑゆくおきなんせなんし **文里** イヽヤヨ
おめへがさも志めてゐるより一下元さんもよく
いやなればこそさふ久しく来るらしいも
はいぞまくしいさ気をみせさる事もねへよらてい
そこよコフベんくとくるもねへまり知恵（ちゑ）が
ねへと知りやるもめこめへくといくらびらおと

ありやすけれどもしほにおめへがさがさつちやさとくして
くれるがうれしさまさハねの子もまことし
がいゝねへろこ気随（きずい）さふであり へハまるくさ
れるすハなんともおりまいがおめへがそのめへだが
へのうみまいをめん人は指（ゆび）をされねへよふ
にまぢねへまやアならぬが一下元さんのふまよく欲
がありつてハしさい（しさい）かまに身づまりになるであらふと
せくすへがおりひすごしが志られてはんじら

わるくこん夜ハまあそふかちは朝ハまあそふかくと
おりかゞじよふなるすをいりしきて見まさて
ろふをおりいれてつゝみていゝよねのこハねのよ
ふまおりかゞおしアへし（ねをのこして）まねをれハともね
れてふ久しく来るとつかも縁ざろふとおもつ
て意見とつてしかゝこめへとおりふがそふで
おれがいりちやアねの子のさあまもかするめへらう
九重さんハ格別のるすぐらおめへがさもらく

よく苦界のいろまけをいつて九のなおるよ
ふま異見をしてやつてくんなせへ頼ぜこれ
でりふおりひのこするすハねへさんやがげ二階
のいとはごひふとおりへハずるなねじなれまなろ
さを（おろうと洞こなす一ツ成八てまなさぶす）こふ久しくきつてろやすく〳〵
ことのそろしこねへとひろてもとしつきやい
できくくいなし階子まるらしいまよと
のゝふまこてろやそくねりてくんなよし

いへど返答（へんとう）はしざれどもなるよ九重座（ざ）しきいでせり締（あつ）らんをかんじいりおのりひはまりてなつきおづつひとえとももなく家（やう）らへやなどまて

九重　おらんハはきれけんよ

一こえ　ヲヤなんでおまへん

九重　なぜ文里さんハ中さうとしらしく

浦里　（うしろからしく云まてのハ泣して）いまの立りてきいておりいしこが文里さんのさてろはがかまいをふで泣（ない）てすらりおりいしさ

九重　おむら路（じ）さんソうて作ら見そくとおのれひくすが胸（むね）がソろだいふよなうてりふされいせんろてきうせておらんなんし

おむら路　アイ（とすけり泣ながら）云てく

がく中のふしいすがよくとのがつまがりなりじうしおきなんせんをりもえしくおいでもなんすけれども二階（にかい）中（ちう）で一座（いちざ）をせねとのまでがどこらやすくだれでもつまくおりふとのハ大きく人もおれせん文里さんらちりとはしがさおひと

おめへさんハなんともおもひなんせんがこんなが
まちぞふらいて居（い）るだらういつていゝすそれ
よりよ御茶屋（ちやや）のまへもおつすといふも
文里さんのるのさらし人は志つてもなんすまま
いがそれぶづけ氣（き）の毒（どく）でありそふなそのでお
す**九重**まあ御文里さんとらぶさハござんせん
くへそれぞやアすみいすめへはそしてはね
ふまん志ずのしといふとのでだんす（一こゑらむさちらりねつてゐる）

といふも胸にもおめへがいつて、せうがねのよ
ふに深切（しんせつ）に志なんすほど意地（いじ）にかゝつて
あるく志なんすがついぞてゝをとうちあん
しこうのもなく今も今もとて、いとゞこひを
志なん〳〵ておれがこゝぬはとでもおめへがはん
まう氣ずいぶんし御（ゆく）きぼがはんじるところ
みなもたのこなんし、こゝろくされるすい
なんともおのらといこんな深切（しんせつ）者さあく人が

ゆゑふとおもひなんすら女郎めへつあがつさいすまへおんはまちがひと公界（くがい）と儀理（ぎり）をおもんりなんしこふすのかいしいすもおもひいすかくでだんす 下え そのすゝはおめへさんがくらてさくしとおめへへソておくんなんすとおもへバソろそれしらおすおんは文里さんハ久しくおいでなんす内もゆらしいるもあくつとめんよくもおすせんし物前（このまへ）の苦労（くらう）をせぬも何やかやめしのせ話（せわ）でへだとおもひすがなぜやらそのふすは深切はさんるあだでなくやでなりいやんしたいもしいすりれどもソでもさりんらくおくへするんす内へ（ねんごろ）でいきのとくはありいしてこんどきなんしさ時ハよく志いやうとおもひてもおとえいすとも川くなりいせんゆゑさかとまさふしとゆうでおすせうかんまん

ておくんなんし　**九重**　ゆきれけへゝよろんへから
さふともなんしと
いきれバたれもされずらく〳〵と座
敷へ続とのこと葉としてはきのごとくそ
かよたちいで何んあくらかへば文里を
はじめ一座の傍輩衆も八泪の袖時
雨一下ごとゝいふて八むせかへり新つん合て八
泣志川ゝ名残を惜しむそのふぜいば
しらんふそのこゝろはきく〳〵とおも
へバおんは今更仮初ならぬ三年の
恩ましかけぐへかはよふはあぜかはかに
しこるのとまさら名残のお別れく
きまり八流れと胸せまり〳〵そのうへ
よばれのへこれまでいたそのまくしこゝ
あく泪まてどあんじるとのころ
さなくあきらけぞとんで繰ぶ八敷身

のはやまりまされとそゞろに氣も乱（みだ）れ
うけてうろうしひきえがん心底（しんてい）よ川と
ぎりに泣（なき）ぬせばたゞさへ哀（あはれ）なけしきの
めよのふまうも一段ハめづらしい泣（なき）前後（せんご）と
まろ川外（げ）志（ず）川む文里ハよふかく兆さ
こりなおし

文里そふさんなが名跡を惜（お）んでくれるハ有会
られしいるさしげねへがそれしたや狗さらへ

ちれねへよつさりと後悔（こうかい）を可んせらく
くんなを（るみぞへなて／なるほどかさなかふ）かんまちふでうこうりのね
へおぎうれハいる経おりひのことぞさね
くんちかと
側（そば）まゆりおふ茶碗（ちやわん）まそて手酌（てじやく）のむら酒二ッ
三ツこんなへめし泣（おく）ハ後（すゑど）のいと後ごひ汲んと
するを一下之（へ）ハゆるまゆゝれぬおりひ稀（すて）ま
とうつき泣ふせハ文里ハぬりきうまま

はくだい

［文里］みやげんのわいそうハられしいがこれよく

きゝな外のきみのよハそうふでもねる客へがたい人

おれがふまえたんまつやとおりふ客人（こきやく）がきまてさ

おめへのふまして八身（み）のきぬんまなつるぬらく

ちりと欲（よく）とえんおせへまろさハまろしむりも

ねへがきてすつさ男（おとこ）ハまれなしていゆな男

の奥（おく）なりは社若（こそく）界（かい）といふをのみことを随分（ずいぶん）

しんぼうしてうけながらいゝ耳（みゝ）をこすつてへ

まことなのちひ句（く）をいつて氣よねつう

ぢかんよんしなと

たちねられバ下（ト）えへ八何とせんさもぞんぞ

しておくんなんしとちんがんねハむせう

へゝ後をおさへて初瀬路ハ

［初瀬路］これ文里さんこんやぞろうハぞうぞいゝく

ねの子の胸（むね）もさいておくんなんし［文里］ハテさえん

てくれてハうしみづくでそいふのてんやさていと
おのふうし【初瀬路】サア　すいぶんむりとハあのひせん
う一トえ（へ）さんもはのすふよいてすうう【文里】ほう
やア三年もこふさこそのごうしまさうよ
ゆいそくぬうだまか【うの】はんでもつくく
しうもぐろせうのそのとでさんす【文里】
おめへぐさぐそのよふよいろてくれるとやはよ
くふれも志んいら【うの】はんすうのふ志いせん

うれしうざんす【ゐずゝの】九重さんハおいでおいで
なんすうらけよしとまつらせてようこそだせ
ゆふしいせうしと
よふく一夜も死をとうなおし迷ふ
おさめて床（とこ）へ入いとねご ひやうれいふやふ家（うち）
引やくへ立（たち）かへる一トえ（へ）ハ後（かう）ふかくとお
かしじけのふざさんすといふまくまも
捨（すて）がくくせ結ゆ成（なる）しれいさんとなく

座をつと立出る文里ハうち掛ぬぎ捨て
帯（おび）くる〳〵としめてたばこくゆらし
居（い）る所へ間もなくぞう〳〵一トゑが足音（あしおと）
こなたハうしろへむきかへて寐（ね）たる枕
子まめてなせぞ一トゑハ眼（ま）ぶち泣（なき）たる
し涙（なみだ）をふきしみす紙をとりまめじく〳〵と
ひねつても何ら志きいのたかりれば気毒（きのどく）
そうに床（とこ）へ入れしハんおちはけどまぶ、

氣まぐれハ文里が胸何かしらずてゐやま
らんとのぞいて見んと考へたる惚（ほれ）て初會（しよくわい）
の如（ごと）く見てゐらんとすれどくゐておを
ひくてはかり格子（かうし）木の数切かぞれ
ハすゝや七ツのゆけちん〳〵りれば おりの念き
りてもしく〳〵とこへどうふ〳〵へあく
今宵（こよひ）いそねバまたりてみの様でいてハか
へるぬるすとおりひまるをハきませられ

なんとせんせへおのひしがおりひやまう
てかんにんしてとつけさけれバ文里
ハ目（め）覚（さう）しをふすまて
文里 なんざびりくりしさと振向（ふりむき）たることを（つきあひしそふ）
しこまさ積（しやく）がおこりさのう **一トえ** 順（じゆん）くのお
そろそろむりとハさらくおりひせんど
ふぞんまんしてと飲（のみ） **文里** これハねつくさ
まりさちらとつりらいるし今よこ人の口（くち）

歯（は）をかみてきりきりしねへがそのつらなしやがる
そのそぶりときさまハおれがつらきんけよ
一トえ そのたのみよおかのせいす旅なぞはのみふかな
気でほれさとおりへハそうを死（し）まふお
つす今さぐ今よだらしぞふで承知（せうち）ハせん
なんすめへと
兼而（かねて）よふいの髪剃（かみそり）にて手をはく被（たれとく）
と口よへ枕（まくら）へほて小指（こゆび）をおしきる紙（かみ）

ま包（つゝ）てあげぶし

下え これまでのあすハらんふんしてこゞろちゝしてちんなんしとぬれくる血（ち）志ほと紙まそてふやぎされんそこやじと歯（は）をくいしやんこてへてあんてもぬるへしハん志づりあんへていじらしれ文里ハとつてなげ出しお面（かほ）とうへて

文里 いゝねへとへんなことを忍ばましてく

わちきあそぶハ志ねへハこれ今（いま）までと八ヶ年もがあるぬもへわいけねへ欲（よく）のねへ事ざと御もふうしろくされ金いとずり川をとがらてかゝりてこふつゞとい仕舞（しまひ）とされてハりふらん志やくまきうまるこれまず川物（もう）さくい若界（しがい）といふとのハ錦（にしき）の夜（よ）ぎをまかしまるもこ（菰）まし一枚（まい）の（辻君）とまでもめん〳〵のすきでつとめするのハひとつもねへ親もちの

たかは身をこがれてねりへばかびんさまは
きずいきまゝも里（さと）のはなしいとそふしてやる
ぞよつらしば只（たゞ）一筋（すぢ）はつらしてさつち
まねりまねそしなみぞ今はなりてあんの
なかるのしくへすはらずくはれどされ
とうがでよえじとふのがちがしさは
らくへてそるをどこへぞうりて金（かね）はしらと
いかなセ八一トえハちでくちゆくはげく

一トえ いか程ちこうもなちいせうそれしまさく
しがんがるだと身をとうらんでおりいすか
セかれて一ト云（え）うんふんしきとつせんへすと記
つきうへで八命（いのち）ハさうしくおまへおすせ
んと
いたいるもせきくる涙よ落きてられん
ハどこへ飛（とび）出さしうりをやまれとお
めひつめん 一トえ どふでもぬしハとつへどえん

むかずす小声（ごへ）にて

文里 江戸（ふ）ヿかいておくるハ、みんの慷慨（ええまと）すくなうござ今下

げも麻（ろ）毛（げ）もなくちやちやふらん

一ト元ハ今ハこれまでとハいぜんのかみそり

とりいだしすでにはやうく見へけるを

文里ハ目てとゞむれどもきかずしてこ

ろしてくれとおばしゆへそふそのもち

よ髪（かみ）剃（そり）をりあげ口へあてゝみて 文里 それ

ちやまうま何故へ死ぬといふかこへ聞（きこ）てう

らめしげよ顔うちまもり 一ト元 何故へ

とハさこへいせんぐわでとくぐわまれハ

せみす赤来（こらい）でいて訳（わけ）いひすうう傾げい

ごふしてころしてとて髪（かみ）も乱（みだ）れ乳も

乱し文里ハまことも自ぶんなく

文里 これさくうぐうなれこれこれさみふ

いなくまぬく顔でもぬさ必さ 一ト元

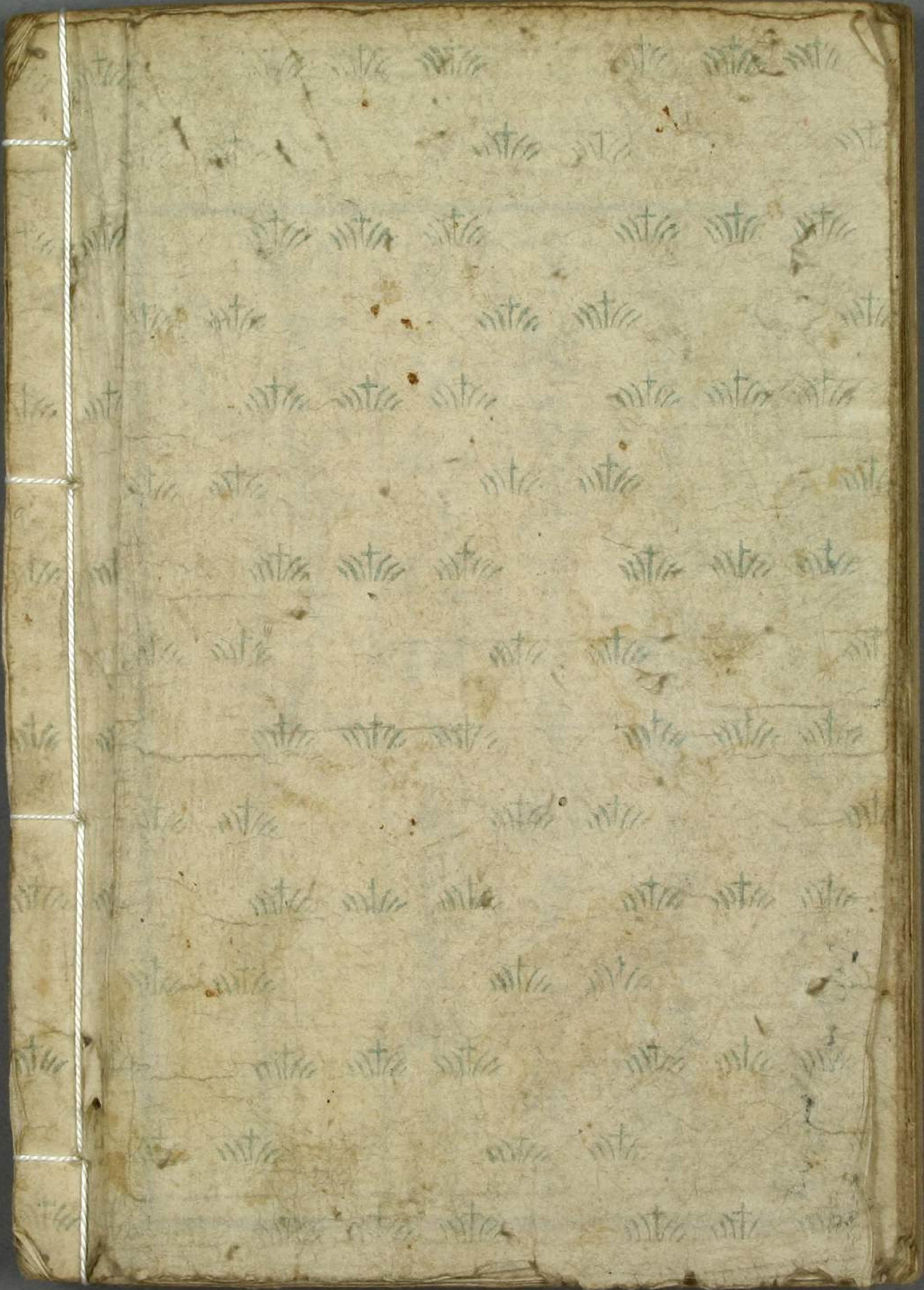
そんなしゝんかん志かんすゝんへ 文里 ムウ カン
かんするよさ
夜は加川とゝえん紀ねるゝ中庭の
連理（れんり）木まてよろこび鳥（からす）
カアゝゝ

自跋

二の勘道とて。世にいふての大なの
善もなく悪もなく。右も左も銀世界。
うかれ鳥のやまひ来たれ。るあれ
雪の旅ひよ。ろしてふ場へ
そのつとやきてきた。是人心そかし。

さりとて吉原へ足入ぬこそ。實の通意と高雄か金言雨降りて地固ふするぞ。此書り足るすを知りは。何ぞ心の雲解よ。泥ひ愁ひなからん

大尾

[illegible]